

レハ五人ヲ減セリ

實業學校教員養成規程ニ依リ學資ヲ補給シタルハ昨年度ノ如ク五人ナリ

明治三十八年七月卒業スヘキ生徒ヲシテ實地ニ就キ研究修学セシムルタメ三十七年九月末迄十七日間ヲ以テ囑託教員壹人助教授一人ヲシテ生徒ヲ引率セシメ京都奈良ニ出張ヲ命シタルコト前年ニ同シ

本校生徒ハ皆通學ナルヲ以テ寄宿生ニ関スル事項ノ申報スヘキナシ

將來施設上必要ト認ムル件〔明治三十五、六年度報告とほぼ同文につき省略。〕

雜件

生徒實驗ノ資ニ供スル爲メ諸向ノ依囑ヲ受ケ製作ニ従事シタルモノ、中重ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

依囑製作品一覽

品名	數量	受託年度	竣工	依託者
會章原型	一本	本年度	竣工	大日本消防協會
第五回勸業博覽會賞牌箱	一〇、五九九	同	同	博覽會事務局
同上	一〇、五九九	前々年度	同	同
石膏製人物	五ヶ	前年度	同	京都高等工藝學校
銀製花瓶	一對	本年度	竣工	東都高等工藝學校
木製畫帖形八曲屏風	一	前年度	同	日本銀行
木製畫帖形八曲屏風	一	本年度	同	登山長藏
渡邊辱五郎銅像	一	同	同	井上はつ
象牙銅扇	一	同	未竣工	牧野伸顯
帝國圖書館壁飾り	五本	本年度	未竣工	文部省建築課
唐銅製無目鏡板	一	同	同	同

『東京美術學校校友會月報』記事抜粹

東京美術學校近時〔二一四〕^{卷号} M・三七・一・三一^{年月日}

○前々號掲載後に於ける職員動靜左の如し。

〔明治三十六年〕十一月七日、學校長正木直彦氏は、高等官三等に陞叙せられたり。

同月二十日、教授高村光雲氏は、内務省古社寺保存會用務のため、

福島縣下白水觀音堂の調査に關して出張せらる。

十二月七日、教授島田佳矣氏は、臨時博覽會鑑査官仰付けらる。

同月十一日、教授川端玉章、同高村光雲の兩氏は各從五位に叙せられたり。

同月十四日、第五回博覽會審査官中審査擔任の勞効に依り、正木學校長、石川〔光明〕教授、海野〔勝珉〕教授の三氏には藍綬褒章を

賜はり、川端〔玉章〕教授、高村〔光雲〕教授、荒木〔寛敏〕教

授、藤田〔文蔵〕教授の四氏には、各銀盃壹個づゝを賜はり、大村

〔西崖〕教授には事務官たりし勞効に依り、藍綬褒賞を賜はりましたり。

同月二十二日、教授白濱徵氏は、教員檢定委員臨時委員會臨時委員

を免ぜらる。

同月同日、教授和田英作氏正七位に叙せられたり。

同月二十八日、^{〔教員〕}發授墨田清輝、同荒木寛敏、同石川光明、同竹内久

一、同海野勝珉の五氏は、各高等官四等に陞叙せらる。

〔補遺。〕十二月一日 教授高村光雲〔東京市依囑ノ淺草公園噴水

器塑造監督ヲ命セラル〕〔職員辞令メモ〕

○圖書教育第一號の發刊 事務所を本校内に置き、圖書教育の上進

發達を圖るの目的を以て設立せられたる同會は、會員相互に同教育の研究をなし其目的を貫徹せんがために、雜誌を發行するの計畫ありしは、前々號にも報道したる所なるが、客臘廿八日愈々標題の如く、會誌第一號を發刊せり。因にいふ、白濱〔徵〕同會幹事は、同教育に關係ある本校卒業生諸氏の陸續同會に入會し、諸氏に依りて同教育の上進發展の實を擧げられんことを切望し居るといふ。

○白濱〔徵〕教授の送別會 同教授留學につき、送別のため職員有志者五十八名、舊臘二十日下谷の伊豫紋樓に會して、送別會を開く、餘興には福引等ありて、近來稀なる盛會なりしと。

○職員諸氏の年賀交換會 例年の如く、一月一日午前十一時、年賀交換のため、職員諸氏一同學校に集合したりといふ。

○白井〔保次郎〕留學生の歸朝期 同氏は一月一日、英京倫敦より因幡丸に搭じ、歸朝の途に上られたるを以て、二月中旬には本邦に著せらるべしといふ。

○東京美術學校一覽 毎年編纂する一覽は、新に卅六年より卅七年に亙る分の印刷を終へたれば、それ〴〵先頃卒業生諸氏一般に配付したり。

東京美術學校近時〔二一五〕 M・三七・二・二九

○前號掲載後に於ける、職員の動靜左の如し。

二月三日、囑託結城貞松（號素明）氏は、助教に任ぜられたり。

同月十日、松園石水氏は、本校學課中英語授業補助を囑託せられ、文庫掛兼務を命ぜられたり。

○職員の入營 今回の日露事件につき、本校職員中、結城助教は、近衛師團第二聯隊補充大隊に二月七日入隊し、羽田〔禎之進〕助教は、仙臺第二師團後備步兵第四聯隊第一中隊に二月八日入隊し、増井〔兼吉〕雇は在中野近衛鐵道大隊に二月廿一日入隊せり。此他猶豫後備の軍籍に在るは大澤〔三之助〕教授、千頭〔庸哉〕石井〔吉次郎〕の兩助教にして、一たび召集の令下らば、直ちに馳せて軍營に赴くべし、諸氏が筆を載せて戎劍を事とするの快意、亦想ふべし。

○從軍と渡米 寺崎〔広業〕教授は陸軍の戦況實寫のため從軍の計畫あり。川端〔玉章〕教授は聖路易博覽會視察のため、多分來五月頃渡米すべしと傳ふ。

○校内の眞蹟展覽 本校に於ては、文庫に所藏せる、古來畫家の手に成りたる作品を文庫閱覽室に陳列して小展覽會を催し、二月一日より毎日懸け換へ、同日まで、本校員並に有志者の縦覽に供したり。

○本校の聖路易博覽會出品 本校に於ける同博覽會への出品は、最初は一室を作りて裝飾を施し、之れに作品を排列して、本校の成績と裝飾の應用とを示す計畫なりしかど、何分にも經費に關係することゝて、遂に之を中止し、結局日本畫科にては屏風及畫帖を、彫刻科にては木彫牙彫の作品を、西洋畫科と圖按科にては其作品を額面に仕立て、別に桐製の飾り棚を造りて、之れに彫刻科作品中の置物に適するもの、及び彫金科、鍛金科、鑄金科、漆工科の作品を排置し、棚の畫は川端〔玉章〕教授の揮毫することゝなり、去る一月下旬漸く出來したるを以て、同月廿五日に之を本校文庫に陳列して、

校員は勿論、本校に關係あるもの、及關係學校の職員並に有志者に縦覽せしめたり。其の出品物の作者及作品の名を擧ぐれば左の如し。

日本畫科出品

四枚折屏風（牡丹圖寺崎廣業、藤に鳩圖荒木寬畝、白蓮紅鯉圖川端玉章、葦に鳴圖岡田秀嶺）▲日本畫及圖按畫帖（各生徒作）

西洋畫科出品

油繪肖像（中澤弘光）▲同時任雕熊▲油繪風景（戸田謙二）▲同花卉（中村勝次郎）▲同靜物寫生（橋本邦助）▲同著衣人物（和田英作）▲同風俗構圖（湯淺一郎）▲水彩畫人物速寫（中澤弘光）▲同歷史構圖（青木繁）▲同裝飾壁畫下圖（宇和川通諭）

圖按科出品

建築裝飾各種工藝品圖按張交ぜ額面貳面（一面に付拾枚づゝ張込み）

彫刻科出品

木彫鶏置物（畑正吉）▲同人物（竹内久一）

鑄金科出品

鑄金人物置物（香田麟橋）

漆工科出品

乾漆製額圖（辻村延太郎）

前記の外、彫刻科及工藝各科に於ける作品は、左記の飾り棚の上に排列す。

桐製各科作品飾り棚

鍛金張分花瓶（平田宗幸）▲木彫文珠置物（林美雲）彫金銀製波

彫香爐（池田芳太郎）▲彫金銀製香合（海野勝珉）▲蒔繪貝合圖香盆（佐野常榮）▲以上棚の最上段に置く。蒔繪秋草圖文箱（石河壽衛彦）▲同葱圖伽羅宮（内藤源太郎）▲同秋草圖色紙宮（故蒔田實）▲以上棚の第二段目に置く。

牙彫鹿置物（石川光明）▲軸盆及卷物（同上付屬）▲鍛金銀製花盛器（藤本萬作）▲彫金鶴鴿置物（山田有方）▲以上は棚の第三段目に置く。

蒔繪扇面散し茶筥（岩瀧多磨）▲同蔦圖棗（近藤延太郎）▲變り塗肉池（橋本市藏）▲蒔繪蹄雁圖硯管付手筥（小岩峻）▲鍛金銅製水入（遠井藤太郎）▲牙角象眼花鳥圖硯屏（石川光明）▲鑄金銅印材（香取秀次郎）▲同文鎖（永島三郎）▲同福壽草筆架（元教員大島如雲）▲同墨臺（坂口朧）▲同銅硯（香取秀次郎）▲以上は棚の最下第四段目に置く。

外に英文の本校一覽額一面を添へたり。

因にいふ右出品は、本校陳列の際撮影せしを以て、不日發刊すべき作品集『作品集二』（東京美術学校校友會編。明治三十八年。画報社）に掲載するの計畫あり。

○文庫閱覽室の建増 本校文庫閱覽室は、從來狹隘を感ぜるを以て、今般第二閱覽室に十坪の建て増しをなしたり。

○本校に於ける懸賞圖按受賞者 其後本校にて依頼を承け、課外に於て募集したる懸賞圖按の當選者は左の如し。

▲醫科大學卒業生寫眞帖表紙圖案

一等 金四圓 圖按科二年 十二町貞吉

二等 金貳圓 同 澤田誠一郎

三等 金壹圓 日本畫二年 小沼 直

▲健胃「血精」新聞廣告用圖案

二等 金參圓 西洋畫撰科一年 今關 胤雄

三等 金貳圓 西洋畫科二年 橋口 清

同 金貳圓 同 科三年 谷 齊一

▲三井合名會社各店營業案内表紙圖按

一等 金八圓 西洋畫撰科一年 今關 胤雄

二等 金六圓 圖按科豫備 三野 雅一

三等 金四圓 圖按科二年 澤田誠一郎

▲額縁及表裝切地模様圖案(集英堂)

三等 金拾圓 圖按科三年 十二町貞吉

同 金拾圓 同 澤田誠一郎

四等 金五圓 日本畫撰科二年 平木彌一郎

同 金五圓 圖按科二年 松川第八郎

五等 金參圓 同 科一年 三野 雅一

同 金參圓 西洋畫科四年 谷 齊一

同 金參圓 圖按科豫備 永榮 定義

同 金參圓 漆工科一年 吉田 秀男

同 金參圓 圖按科二年 森垣 榮

▲新潟縣農林學校校旗の徽章圖按

一等 金參圓 圖按科三年 十二町貞吉

二等 金貳圓 同 科二年 松川第八郎

三等 金壹圓 西洋畫撰科二年 今關 胤雄

同 金壹圓 日本畫科一年 鹽崎 一郎

▲阿夫利神社再建紀念章圖按

一等 金四圓 漆工科一年 中西 信一

二等 金參圓 圖按科三年 澤田誠一郎

三等 金貳圓 同 二年 松川第八郎

▲歌舞伎座引幕圖按(阿部吳服店)

一等 金三圓五十錢 日本畫科二年 大村 友雄

二等 金貳圓五十錢 同 撰科三年 伊藤 豊吉

三等 金壹圓 同 本科三年 小沼 直

同 金壹圓 同 科豫備 小川 巽

▲教育繪はがき圖按(八枚一組)

一等 金六圓 日本畫撰科一年 桐谷長之助

分割 金六圓 同 二年 平木彌一郎

二等賞金は八名に分割贈與したり

▲恵比寿麥酒團扇圖案

一等 金五圓 圖按科三年 十二町貞吉

三等 金貳圓 西洋畫科豫備 中野 修二

同 金貳圓 日本畫撰科二年 水島爾保布

四等 金壹圓 同 同 平木彌一郎

同 金壹圓 圖按科一年 三野 雅一

○本校生徒の受賞 中央新聞社に於て、廣告懸賞圖按五種を募集したるが、其中左の三種に於て、本校生徒の賞を受けられたるものあり。

▲中將湯圖案

一等 西洋畫撰科二年 今關 胤雄(號召甫)

▲めざまし齒磨圖按

一等 西洋畫撰科二年 同人

▲酒造火災保險會社圖按

一等 圖按科三年 十二町貞吉

○西洋畫科パレット會 同會に於て從來毎月積立たる會費は、今回の事件に就き、本月よりは日露關係の結了期まで其の保管を學校に依託し、軍事費の内に獻金することゝなれりといふ。

○同科成績品展覽會 同科にては一同大奮勵にて製作に従事し來る四月を期して一大展覽會を開設し、公衆の觀覽に供し、其の所得一切を上げて軍事費の一部に獻金するの内議整ひたるに付き、他科諸彦も御同意あらむことを希望するといふ。但會場は未定のよし。

教室雜俎〔同〕

●日本畫科一年 初めて御目見え、此度は仁義一通で御免蒙つて、皮肉的に我級の名物を申上ますから、同級諸君腹が立つたら偏に御用捨、……………先づ我級の三名物男を申上ます。第一にましますのは羅漢様である、此名の起りは、よくは分らないが、其慧顔が羅漢に髣髴なので名號を捧げたのだらうと思はれる、此羅漢様は決して笑つたことはないと言ふが、又一説には生れてから、たつた半度笑つたことがあると云はれる、兎も角も〔稱々〕燦々たる眼光人を射るとは、全く此羅漢様のことであらう。第二にましますのは鬚男と云ふ名物男で、一名達摩〔摩〕とも云ふ、之れは日光旅行の時に〔寺崎〕廣業先生が達摩揮毫の際、モデルになつたので、其尊名を賜つたそうな、所で此大師海に千年川に千年又山に千年業をやつたつて、其手

足が失せようとは露思へない程頑丈の御躰格で、擊劍と來たら實に恐れ入つたもの、〔あつじ〕適れ寒稽古を只一人でやりとうしたと云ふ、偉いもので、遂に獨勝流を發明したそうな、昔鞍馬の牛若も思ひやられ、後々は連れ豪傑の鬚男となるだらうと、深く感服。第三にましますは少し變な名であるがノツポー男と申します。之の名の起りは素適滅法、身丈の長いので起つたそうな、實に其辯舌の達者と來たら、學校は愚か東京市を辨當持で探したつて、二人とは覺束ない、快辯流るゝが如しなど云ふ言葉は、此先生の辯舌の千分の一も評する値がない、實に其奇抜の言葉の使方は、感服に堪えない、是の冠頭にかいた仁義一と通りで御免蒙つて、「子ンビ、子ンビヤクチャ々々、ムチャカ、チャ、々々、ナンピノ、アヤフヤノ、ケタモノ。」など言ふ句は誠に語り方の妙を得たるもので、其他口外に出すことは、悉く名文麗句、實に膝栗毛、浮世風呂も之れには及ばない、うそと思つたら一日御免蒙つて拜聴するがよい。其他セコンド名物男にはスツボン、カグラ（此れは日光で其名の免許を得たそうだ）狗子啼、鳥鳴等に妙を得たる名士澤山あるが、此度は先づ之れで御免蒙ります。

（滑稽男投）

●同科二年 曰く黙々道人、沈痛居士、曰く面壁尊者、諸同人盡く是れ菩薩ならぬは無き當本科生、内心如夜叉とは餘りに酷なれど、幽乎として、神祕陰險の夜氣に満ちたるは、怖ろしとも怖ろしや、されば刻下の雲行に、寄ると觸ると叫喚阿眉〔鼻〕の物語、そは地獄の沙汰ぞと耳さへ塞ぎて、あはれかばかりの勝利に心を跳らし、提灯の、炬火のと光明を求むる聲のみ多かる世は闇か、黒雲か、一夜月冴ゆるの時、出でて郊外の寒風に立ち、其美的遍照の光明に接せよ

と、中なる背高き某は空嘯ぶくなり、又何某は曰はく、行列は元我校の特色、凡俗なる提灯の眞似事に、上野の山猿と思はれむも耻しや、若夫れ露國全敗の報あらん時、余輩をして暮雨悄々落花狼籍たる中に彷徨して、盛んなる泣面行列を演ぜしめよ、菩薩の表情亦大に見るべきものあらんと、他の何某は曰はく、戦捷に狂奔する正に可なるべし、されど尙川端先生の渡米せらるるに至ては、「川端玉章の渡米計画は中止となった。」藝術上更に大に祝すべきものならずやと、斯くの如くにして皆依々たり。

(西村)青歸

●日本畫科三年 拜啓仕候、當欄も其後久しく寂寞の有様にて、各教室の消息も一向に聞え不申候處、如何御消光あられ候や、今後は又舊に復して各自の御消息御漏らし下され度候。俸本年冬季の寒さは又格別にて、昇校の途中にて、大概手も足も凍へる始末ゆゑ、教室内にては、昇校の順序により、ストーブを圍んで圓陳を作り、所謂ストーブ會議なるものは先づ開かれ候。先達てまでの議事は、毎日御定まりの冷かし、素破抜き、悪口、洒落の持ち切りにて驍將牧野〔左武〕君が「伊藤〔豊吉・綾春〕はなア」を絶叫するも又此時に候。此會議を傍聽すれば、凡そ各自の短所や、失策や、滑稽や、祕密が盡く暴露せられて、此の級はよく／＼の悪人輩の寄り集りの様に聞え候處、此の頃は日本と魯西亞との戦争が始まり、號外の呼び聲が間斷なく聞える様相候ては、有繁此の級も初めて、稍々人間らしき動物らしくなりて、人間並みに敵愾心も出て來り、議案は戦争の事のみと相成り、てんでに讀んだ新聞記事の共進會相始まり申候。先づ牧野君は先達て大枚六圓を投じたる靴を搔つさらわれたる故、目下和服にて出校致し、切りに先きに劍を筆に代へたるを悔

しがつて、むかつ腹を立てて、支那に居らるる兄さんの腰を押し、腕を撫でて憤慨して居る所へ、「旅順の海戦大勝利だ」と上野中響き渡るやうな大聲にて、教室の外より洞鳴り來て、突然モデル臺の上に乗つて旅順の戦争の模様をしゃべり出したるは、例の古賀〔源四郎〕君で平常とは何となくお顔色迄變つて相見え申候。すると級中第一の色男を以て任ずる漆黒の麗髪を左の方から美事に分けて、銀縁眼鏡にコスメチック、御顔は毎朝剃刀を當て、來る………イヤコリヤア昨日剃たんだ……と云ふ評判の木村〔鉦吉〕君が面白い手付きして古賀君に和する、其の中伊藤綾春君も金縁眼鏡ですまして來る、此の頃髪を分け始めて、まだ思ふ通り工合良くないと云ふ金子〔朔太郎〕君もやつて來ると云ふ有様にて、共進會は愈々盛になり申し候。又戦争が始まつて世の中が物騒になれば、敵國の兵士が美術學校内迄も分捕りに來るものと見え、過日は教室外の帽子掛けに掛けたる、金子君の外套が紛失して索めども探せども出て來らず、此の寒む空に外套が無くては、あたら男を見落されると、めそめそ泣き玉ふ様、誠に他所の見る眼も氣の毒に候ひしが、翌日になれば又候外套の紛失、今度は伊藤君のと來たので、天晴れの好男子二人、机の上に首を揃へて泣きならぶ様、恰かも焦熱地獄に蹴落されたる亡者が、地獄の門にて牛頭馬頭の鬼共に、衣剝ぎ取られて泣き悲しむ、それにも似て、誠に哀れに相見え候ひしが、思ひきや之れは古賀君の御イタにて、其御手から間も無く下げ渡され候故、伊藤君は死せしと思ひし愛兒の蘇生せし思ひにて、青い顔は忽ち赤く相成り候へども、金子君の分は依然出て來らず、益々氣の毒に候處、茲に一人の同情厚き人ありて、君を慰めて申し候様、「金

子落膽するな、おれの外套も去年の春から質屋に入つてまだ出て来ぬ」とこれには金子君も多少の慰藉を得られたらんと察せられ候。先は右迄早々（深切生）

●同科四年 表情筋の講義の際、最も好き表情筋の作用が、まのあたり實驗せられたりと云ふ、面白い話を記さう。

そは先月我級が例年の通り、市中の主なる各學校を順廻し、圖書教授の實況を見聞中の時の事、其最も参考の價値（？）ありと云ふ、女子美術學校を參觀すべき、次ぎの木曜日は生憎解剖學のある日と、ぶつつかるのであつた。然し是を看々視落さんは、千歳までのうらみ!!!。なるかならぬか今日は是非久米〔桂一郎〕先生に談判して、時間を繰りかへ貰はんと一決し、其全權はそこいらの參觀に最も熱心の聞え高き、大極〔渡辺忠三郎〕君に一任する事とし、开が談判の手續も丁と定めて、一足早く講義室に入りて控へて居た。聽て先生入り来る。折も折丁度先生より他の事につき、時間の打合せがあつたので、大極君即ちこゝなりと、鬼に金棒、龍に雲を得た様な喜び、餘りの嬉しさに、小學校で覺えた古い癖が出たのか、どうかは知らぬが、覺えず前膊を上外方に翳し、先生々々と呼はり、前の一伍一什を物語り、時間變更の儀を、掌を合せんに歎願せしに、さしにも森嚴なる先生も、是を聞き、さも可笑さうな語調で、女子美術………と云はれたまゝ、次の句が出ない。其中に大極君先づ仰天大笑、續いて一同がどつとふきだし、果てはモデル爺々々で笑ひこけ、鬨體も遂に搖ぎ出す。（局都生）

●鑄金科 一般から云ふと、鎖國主義で、消極的の方針を取つて居る、野帆な科の見ゆるだらうが、是れは鑄金科の各科に對する

形式的の態度である。各科も亦鑄金科に對する概念は、先づ此の邊であらうと思ひます。總て具躰物は形式と資料とに由つて、構成せられて居る者でありますから、前者のみを知りて其の全躰を言ひ表はす事は無論出来ないものである。ソコデ鑄金科の内容、即ち我が科を組織して居る資料を白狀するが、一躰吾科は、昔から系統的にあまり或る科の様に極端なる、積極的態度は最も排斥して居るのである、其れ故に自然あまりにトツピなる現象を作らぬのである。然し科内に於ける相互の交情に至りては、極めて親密で、然も無遠慮勵行で、ヘダテと云ふ事を最も排して居るのであるから、此科は内和と云ふて良かろうと思れます。内和と云ふて女性團の集合とか云ふ様な志弱な、不決斷の科と誤解されては困まる。斯様な手段に由りて、平和平等に維持し來つた我が科は、實に理想の科として、十分であらうと思ふ。ソコデ科内の面々の意氣は、相投して居る、先生方や工場の方も、皆同情に集つた人であるから、極めて相互の關係が密である。他觀的野帆でも、眞裡は斯様で中々輕視しにくい科であらうと、我田引水ながら思はれる。

いくら鑄金科が砂や塵の立つ仕事をすからとて、もう少し教室を清潔に規律正しく學校らしく出来そゝなものだ、工場着は誰の机の上でもかまはず脱き放し、又机の上には砂と泥とで山の様になつて、其の中に鍔や金鎚など埋まつて居る、仕事をして居る間は仕方がないが、仕事を終つて歸る時は、仕事道具は元の道具箱へ入れて貰ひたい、そゝしたら小使も机の上を掃ふてくれるだらう。近頃生徒が多くなつてからの事だ、以前はコンナに汚くはなかつた、何時も參觀人が蒔繪や彫金などの奇麗な教室を見てから、我が教室を見

たら、何と思ふだらうか。

また我田引水の趾つぎが出た、一躰我が鑄金科ほど全生徒擧つて勉強な科は無かるうと思ふ、朝學校へ来るや否や、第一に工場着を着て腕を袖に通しながら、工場の方へ行くのが實に熱心らしく見へる、況して萬屋的で、一日中各教室をかけ廻つてばかりいなくてはならぬ、本館で學課終つて歸つて仕事を初めると、また鈴が鳴る。

「あ困つた、仕事がやりかけだ、明日まで此のまゝにして置くタイプが冷えてしまふ、あ湯も沸かし掛けた、仕方がない、此度は躰操だけれども躰操は休もう」と云ふわけだ。コンナ工合で目を丸くして、一日に數多の教室へ顔を出す爲めに、かけ廻るに費やす時間も大した者だ、一年に見積れば前に云つた教室の汚い事や、道具の出しばなしなどは、コンナに忙はしいからでもあるう、忙はしい時には、ドウしてもやりばなしになるものだ（S N生）

●西洋畫科 風蕭々兮易水寒。壯士一去不復歸。あゝ時運の潮勢は如何、あゝ二月七日！二月七日！特筆大書すべき二月七日、あゝ平和の光室に滿ち、圓滿の香四邊を罩めた、入谷五人男が住居、此日の午前を以て終に解散せられた、滿目蕭條たる入谷の野は、此に一段の寂寥を加へたのである。あゝその入谷！何とゆかしい、何とは知らず我が否我々が胸をおとらせ、心を引きつける露に匂ふ朝の薔薇の香の様に、女蝶男蝶がたのしく戯るゝ葦の花の、日盛りの薫の様に、何ともいひ知らぬ一種異様の魔の力ある入谷の里！あゝ我れは今の閑店に比べて、温かに愛を以て漲つて居つた、つい此間までの生涯を思ひやつて、坐る懷舊の情に堪えない、あゝしかし此の愛を以て漲つて居つた生活も、實は去年の暮にははや萎えかゝつてし

ほれかゝつて居つたのである。あゝ誰れか此時流に反抗して、此の漲溢滿々たる濁流を堰きとめる事が出来様ぞ。そも／＼此の濁流はいかにして生じたか、かくも激しく急はしく、然しそれは今此に云ふまい。

あゝ我が……我々が親しかつた友、あのフガ／＼の端書屋の四十許の面白い内儀、お世辭をふりまいて我々を歡待してくれた豆屋の内儀さん、實に愉快な心切な（決して茶菓子を買つたために賞讀するのではない）、色の白い、きめの細かい……それからそのあのお菓子屋の……まだ澤山あるが、それから、も一人忘れ様として一寸の間も忘れぬものがある。我れに獻身の愛を捧げて、死なば諸共、地獄の底までも（極樂淨土ならば願つたりかなつたりで尙の事）とまで思ひつめて、我が通る度に必一揖眼にもの云はせて嫣然笑をもらす……云ふまい／＼、しかし云はぬも残念！一思に明かして仕舞ふ、此れこそ蝸屋の主婦、六十許り、ふとつちよのお婆さんである。あゝその美しい皺だらけの貌が眼の前へちらつて來る、あゝお婆さん／＼しかしおもへば此は皆過去の歴史、歴史中の人物ではないか、樂しかつたも過去の夢面白かつたのもまた過去の夢、あゝ垂名千歳の南歐の大詩人ダンテが名言「憂の日に樂しかりし時をおもふ程悲しきはあらず」といつた事がそゞろ胸におもひあたる。

それについても思ひ出されるのは、舊臘を以て單身斯道のため、北米に渡航した敬助柳兄の身の上である。彼れも五人男の一人として、入谷に花を咲かせた大種播の一人だ、兄が藝術に對する、かの熱心忠實を以て進んだなら、假令藝術の原泉よし遼遠なりとも、よ

し深奥くとも、其清泉を尋ねて、之れに浴するは難くはあるまい、あゝ諸共に藝術に捧げられた——理想の權化ではないか、あゝ明治三十六年十二月の日も、十二日の午後二時、信濃丸甲板上に悄然と立つた彼れが姿はどうであつたか。腫れぼつたい、うるんだ蒼白い顔……今やなつかしい郷土をはなれ、親や友に別れんとするのである……しかし一種輝き渡つた眼の底の活氣……希望の光りはその中に燃えて居た。

汽船は別離の涙を汽笛の聲に雨と降らせて、終に此の氣鋭勇邁の青年を載せ、遙か東方文化の地に運び去つた。

あゝそれ／＼見えるぢやないか、そらセントルイ市のそーれその十ニ樓の煉瓦造の家の前に、木免然と立つて倭小の身軀を、半ば驚きに半ば輕侮に顛はせながら、光ある眼には何等かの感慨を涙と化し、あゝその凜としたその容貌。

あゝそら美術商の店前に立つた、身動もしないで一心に眺め入つてる、何の畫にか見惚れて居るのだらう、彼の心の中は今甚麼「什カ」であらうか、云ふまい／＼云はずとも知れて居る、心ある人は美神の忠實なる、此の一愛僕が衷心を推し、理想を察するのは容易な事であらう。(〇〇生)

東京美術學校近事〔二一六。M・三七・三一〕

○前號掲載後に於ける、職員の動靜を録すれば左の如し。

二月十日、學校長正木直彦氏は、從五位に敘せられたり。

同月十八日、劍術指南松石涉氏は、依頼「願」解囑せられたり。

同月廿六日。曾て佛國獨國に留學中の助教授白井保次郎氏は、此日歸朝せられたり。

三月二日、木村敷秀氏へ、躰操副科劍術指南を囑託せられたり。

同月三日、山野繁輝、土屋軍治の兩氏、各本校雇を命ぜられ、山野氏は文庫掛を、土屋氏は教務掛兼庶務掛を命ぜらる。

同月八日、助教授石井吉次郎は召集せられ、第一師團後備歩兵第一聯隊第七中隊へ入隊せられたり。

同月十五日、助教授白井保次郎氏は、教授に任ぜられ、高等官七等に敘せらる。

同月十八日、教授白濱徵氏は、米國へ向ひ留學の途に上られたり。

同月廿二日、助教授河邊正夫氏は休職を命ぜられ、農商務省實業練習生として、米國へ向ひ出發せらる。

同月二十八日、教授寺崎廣業氏は、休職を命ぜられ、同日更に戰爭畫取調を囑託せられたり。

〔補遺。〕三月三十日 教授石川光明竹内久一海野勝珉正六位ニ敘セラル〔職員辭令メモ〕

○從軍と戰地出發 別項記載の如く、寺崎教授は休職を命ぜられ、更に戰爭畫取調を囑託せられ、且既に陸軍省よりも從軍を許されたるにつき、四月初旬戰地へ向ひて出發せらるべく、又嚮に召集せられたる羽田〔禎之進〕助教授は三月下旬、増井〔兼吉〕雇は三月四日孰れも戰地へ向ひて出發せられたり。

○軍資及恤兵獻金 前號にも記したる西洋畫科の「パレット」俱樂部會員は、金拾壹圓拾貳錢を醸金して陸軍恤兵部へ、圖按科生徒澤田誠一郎氏は、金五圓を軍資金として、何れも本校を経て獻金したり。

○恤兵獻金の繪畫展覽會 本校日本畫科生徒諸氏は本校の許可を得て、當該教員の贊助に依り、四月十五日より十七日迄三日間、校友會俱樂部に於て繪畫展覽會を開き、其利益を恤兵部に獻金する筈。

○生徒の應召 本校の生徒にして召集せられたるもの數名あり。其科別及召集の種類を記せば左の如し。

西洋畫撰科二年 内村 愛助

右二月廿一日より補充のため召集せられ、島根縣那賀郡濱田歩兵第二十一聯隊、第二大隊第七中隊へ入營す。

西洋畫科一年 中村 梅吉

右充員のため召集せられ、三月八日四谷區信濃町輻重兵第一大隊へ入營す。

西洋畫撰科二年 野口 峰吉

右第一補充兵の處、軍事教育のため、四月一日より九十日間、肥前大村の聯隊へ召集せらる。

西洋畫撰科二年 伊藤 直利^(和)

右第一補充兵看護卒として、近衛歩兵第一聯隊へ、四月一日より入營す。

東京美術學校近事〔二一七〕 M・三七・五・一〇

○前號掲載後に於ける、職員の動靜を録すれば左の如し。

三月三十日、教授荒木寬畝、石川光明、竹内久一、海野勝珉の四氏は、何れも正六位に叙せられたり。

四月五日、本年假入學生に課する授業擔任者を定められ、教授和

田英作氏は、木炭畫擔任を、教授白井保次郎氏は、彫塑擔任を、助教授岡田秀氏は、日本畫擔任を命ぜられたり。

同月十一日、助手水谷鐵也氏は、彫刻科助教を命ぜらる。

同月同日、鶴田幾太郎氏は、本校雇を命ぜられ、日本畫科助教を命ぜらる。

同月同日、假入學に課する授業補助者を定められ、雇水谷鐵也氏は彫塑授業補助を、雇小林萬吾氏は木炭畫授業補助を、雇鶴田幾

太郎氏は日本畫授業補助を命ぜられたり。

同月十五日、教授岩村透、同大村西崖の兩氏は、御用有之米國差遣仰付けらる。

○假入學 先頃來募集したる本校本年の假入學生は、昨年より増加を來し、公私立中學校卒業生七十名、府縣知事の推薦に係る師範學校卒業生七名、香川縣工藝學校卒業生二名、計七十九名に入學を許し、四月十八日より授業を開始する筈にして、其授業擔任の教官は前に記す所の如し。

○競争試験に依る入學者の募集 假入學生の募集及人員等は既記の如く多數なるを以て、競争試験（實技試験のみ施行のもの）に依る入學志願者は何名を募集するや否や、其人員は未だ確定せざれども、入學志願のものは、六月一日より二十日迄に、本校へ到着すべき様入學願書を差出すべく、其試験は同月廿二日頃より施行する筈なりといふ。

○寺崎廣業氏の出發 同氏は戰況視察のために、戦地に赴くべきこととは、既に報道したる通りなるが、愈々四月十三日午前九時三十分、三浦孝氏を從へ、新橋を發して戦地に向はれ目下廣島に滞在

なり。

○川端教授其他の渡米期 聖路易萬國博覽會觀覽等のため渡米せらるべき川端教授は、岩村教授其他の諸氏と共に、多分來る五月二十日頃出發すべしと傳ふ。

○西洋畫科の第二回恤兵寄付金 三月分の陸軍恤兵寄付金は、金拾圓八拾壹錢にして、第二回分として此程獻金せり。

○本校生徒の受賞 圖案科の三野雅一氏は、三月廿六日の日本圖案會常會に於て、懸賞圖案石鹼入箱表ペーパーの課題にて、一等賞及二等賞を得たりと。其圖案は四月五日の美術新報に掲載せり。

○本校卒業製作の貸與 大阪に於て、四月一日より六十日間の豫定にて開設せらるべき、内國製產品評會の美術館へ陳列のため、本校の日本畫科卒業製作を借受けたき旨、關西同窓會より願出でたるを以て、本校にては之を許可し、兩三年來の卒業製作中、左の十數點を貸與したり。

梧陰の鶏	明治三十三年卒業	宮脇平太郎作
樓閣山水	同	鶴田幾太郎作
菜花	同	小倉善三郎作
卒業歸途	明治三十四年卒業	藤井 豊作
初秋山水	同	前波覺次郎作
綠蔭少女	同	有馬 龍秀作
曉霧	同	杉野松太郎作
孔雀	同	杉浦 朝武作
昭君嫁胡	同	植松 雅行作
月下鶉	同	村上金次郎作

嫦娥 明治三十五年卒業 足立 啓作

關ヶ原 同 淺野 春二作

光明皇后 明治三十六年卒業 永倉 茂作

唐美人 同 西方 俊造作

昔語 同 田中 和一作

○文庫の圖書閱覽票と閱覽證 今般本校文庫に於ては、標題の如きものを作り、生徒は勿論卒業生諸氏にも之を適用し、又校長の許可を得たる世間の藝術家にも使用せしむるといふ。因にいふ、文庫の開閉時間は從來午前九時より午後四時迄なりしが、先頃文庫規則を左の如く改正せり。

第三條 文庫閱覽室は、左の時限を以て開閉す

毎日午前九時開 午後五時閉

第二土曜日に限り午後一時閉

但日の長短により時限を伸縮することあるべし。

○生徒の卒業 昨年七月學年試験の際病氣の故を以て、卒業試験を延期せられたる、日本畫科の葛揆一郎氏（巖手縣士族）は、三月二十九日卒業證書を授與せられ、同時に文部省より、圖畫教員免許狀を下附せられたり。

教室雜俎〔同〕

●日本畫一年一寸御免蒙りやしよ、イヤハヤ世の中は滑稽なものじゃ、無理もない我がクラスに羅漢達の達磨、スッポン、カグラ、おまけに魯西亞人が知らぬが、今まで名の聞いた事の無い、ノッポとやら申す恐ろしいものが居て、「子ンピ子ンチャクチャヤムチャ

カ」何を云ふのかサッパリ分らない、如何な龜の子も此れには頭を引こめんと居られない。靜かに案ずるに此れは全く各々似合つた代名詞ならん、さるにしても、カグラ、スッポンとは以ての外じや、さも人間の資格を失ふたかの様で聞かれても外聞が悪い、大寒も過ぎ去つて間もないに、馬鹿に暖つたかい、さては例のストーブ會議が始まつたのか、頸だけ御免蒙つて邊りを見廻すと、御座るわぐく奇妙キテレッツな者がざぐぐくとお揃ひだ、御恩返へしに三幅對でも作つて御照會致さう、皮肉な所腹の立つ所は讀まないでも良いから、先づ第一番に頭ハイカラ、一名自雷也がりと申す三人有之、山田〔廉〕君、秋山〔政三〕君、山村〔豊成・耕花〕君、何れも揃ひの好男子、セコンドには三橋〔信吉〕君、此の頃コスメでメツキリ、二番丈け長人種は、例の佐々木〔璋松〕君、三橋君、小泉〔勝爾〕君、高さ各々一萬二千尺「そんな奴アありやしない」併し七尺はタツプリ見受けられ候、三番髻男、此れは已に御照會に成つて居る有名の相馬〔治四郎〕君、おつかない顔の伊藤〔貞夫〕君、イヤハヤ秋山君、中にも秋山君のは乙なもの、長く拜見すると何んだか不景氣の様にも見受けられ、今少しお手入れとはお氣の毒千萬、四番丁寧家の山田君、近藤〔治義〕君、荻生〔守俊・天泉〕君、よく云へば勤勉家悪く云へば馬鹿正直とでも、飛んだ御災難眞ツ平ラ、五番は、だんまり家小泉君、長井〔幾磨〕君、橋本〔乾〕君、お行儀の良サ加減、婦女子連も一步譲るならん、終りに望むで目玉はアノ福富〔常三〕君、ヲーお待ち兼ねの佐藤君、今ひとりには云ふ迄もない大變だヲーコワイ頭でも引ツ込めやしよ（龜の子）

●彫金科 東西く、豫て評判なる我が彫金科の内幕を諸君にチヨ

イト御披露致します。諸君の御承知の通り、我が彫金科は一致團結して先生方と生徒間の關係は、頗る非常に親密で、外で見る目も羨しい程であるから、まるで親と子の様で、餘り犬も喰はない夫婦喧嘩はなく、何時も平和的に我が科の内閣が納まつて行くとは、誠に欣喜雀躍の至りで御座います。又我が科の如き呑氣な教室は、とても鐘大鼓でさがしても、世間には在るまい、千年の壽命も伸びる様で、誠に極樂世界に住んで居る様な氣がする。それに一鉢全鉢生徒諸君が、頗る非常に勉強家揃ひで、早朝より午後の三時半まで、至極熱心に勉強なされます、決して我田引水でない事は保證致します。若し法螺だと思ふなら、我が教室を覗いて見給へ、僕は今まで嘘と尻餅搗た事ない、何に事も我が彫金科の如く、一致團結して勉強なさば、彼の野蠻國なる露西亞を全滅なし、芽出度日本大勝利となる事受合なり、我が科の諸君よ、此上にも益々勉強あらん事を祈る。（夢樂生）

●鑄金科 回顧すれば、頃日文部當局者は我々學生に對し、保安衛生に關する注意を頒布せらる。恐くは健全にして有爲の技術家を出さんと欲するの精神に基くや疑なし。故に各自奮ひて此の主旨を嚴守すれば、唯に當局者の満足を得るのみならず、一身の爲め瞬時も忽にす可からざる事なり。凡そ事を成功せしむるは、各自の精神に由るは言を俟たずと雖も、當局の境遇如何は、成功の成否に有力なる關係を有するものなり。境遇の許す可きものにありては、宜しく進んで主旨實行の敢て難きに非ず、寧ろ成さざるは薄志弱行の誹りを免れざるなり。是に於てか、余は本校各科に付て詳細に主旨實行の難易を論ぜんと欲すれど、こは制限ある欄劃を填塞するの恐れあ

り。茲には唯だ鑄金科の尤も困難なる境遇にある事を紹介せんと欲す。

抑も鑄金の學生たるや、炭烟泥沙滿場に渦く間に、南船北馬製作に従事する者、到底疊上に座し、清風埃々たる間に、頭手を弄する輩の豫想し得ざるの境遇にあるを以て、大々の精神に顧慮を要するなり。人或は謂はん、一定の時間を以て製作に従事せば如何ん。之れ鑄金技藝の客觀的方面の斷定を取る者の言のみにして、未だ鑄金の主觀的方面を知らざる者なり。此に一度び積極的狀態を取らんか、寸毫も其の間に消極的狀態は免れざる一種不可思議なる技術なり、是に於てか余は我科諸彦の留意を求めざるの得ざるの必要を感じり。即ち文部當局者の主旨に基き、非常なる注意を以て身軀の健全を謀る事、換言せば他科の諸兄の要する數倍以上の注意を必要とすることは是れなり、然らずんば大器晩成は到底望む可からず、茲に余は汲々として我科諸兄に強壯を期せん爲め、苦心慘憺一種の快樂團なるが如き組織を成立せん計畫なれど、未だ名案なし、然りと雖も日ならずして發表せん、多少貢獻する所あらば満足なり。終に臨んで尙我科に注意することあり、余頃日先輩に訪ひしに技藝家の技藝に倒るゝは恰も將士の戰場に倒るゝが如くせよと、之れ余の理想を空々漠々の内に葬らしむるの一言なり。果して技術に倒るゝと戰場に倒るゝと等しきや。余が弱冠を以て按ずるに毫も因果連絡を認めず、之れ恐くは比喩の誤謬ならんと思はる。余は尙ほ後日名士の意見を叩かんと欲す。兎角に現在に於る業の何たるを問はず、處世の要訣は業に熟達し、長命を期するにあり。單純なる理由の許に得難き健康を破り、生命を捨つるに於ては、無謀も亦甚だし。要するに

鑄金學生たる者は、一大的覺悟を以てし、境遇の許す可き限り、所謂文部當局者の主旨を有効ならしめ、技術に熟達せん事急務なり。學識素養、一文不通の余が所説、自家撞着の個所も少なしとせず、乞ふ幸に諒せられよ、(ペル、ツリー生)

○西洋畫科 人は總て新奇のものを好む、所謂珍らし物好きは人間の天性である。唯古きもの許りにへばりついて其れに満足しては、其れ以上の進歩は望まれないのである。此珍らし物好きの天性ありてこそ、人間社會の總てのことに、進歩向上があるのである。我が西洋畫科の前にある遊動圓木も始めには大變珍らしがられたが、追々乗り手が功者になりて、丸太乗りの曲藝、首尾よくしてのけられる様になると、同時に倦きが來て、何か他に新奇な珍らしいもの、をと云ふ、人間の天性が發輝せられた。茲に於て、進歩向上を欲する我々珍らしものが、相集まりて、フット、ボールパーチイが出來。各自財布の底を叩いてフットボール、一個を買つた。ドカーン／＼。是が、フット、ボール。の鳴き聲である。買つた其日から、例の珍らしものの好きの人間の天性を有する人々は、皆夢中になつて、フット、ボール、を大事にするの何んのか。下へも置かぬ様にして、始終、上の方へ蹴つてばかり……。パーチイ、のムムバア、以外。無類のモグリ彌次か加はつて毎日、ドカーン／＼の音は絶へなかつた。難有迷惑なるは、フット、ボール、先生で彼方で蹴られ、此方で蹴られ。地面の上を引づられたり、木の枝に引懸かつたり。身軀には擦り傷打ち傷絶へずして、終日、ドカーン／＼と甚だ悲鳴らしくなき悲鳴を擧げていた。其中に、トウ／＼重傷を負つた。此を見て驚いた我々熱心家は彼れフット、ボール、

先生！を神田の方の赤十字病院に入院させた。處が。案外經過よく一日にして退院した。そこで又我々は。彼れの爲めに、床揚げの祝ひもせず、すぐ又、過度の勞働を、彼れに強ひた。フート、ボール、先生も、よく／＼因果なことと思つたらう。然し。是れも、しかあるべき運命に生れているのだから仕方がない。

前述の様に畫くと。我々は、毎日、畫も描かずに。フート、ボール、計りに、熱中していた様だが。左にあらずだ。我々とて本分は知つてゐる。畫の研究も中々、人に劣けずにやる。只朝早くきてモデルの来る迄及間々の休み、午後の放課後等に。スチューヂオ、の中に、くすばつた身軀精神を。新鮮にする爲めに、やるので。怠惰者と誤解されると、つまらぬから、一寸斷つて置く。

然し、僅かの時間でも、練習は恐ろしいもので。遂に。一週間もやつて後は。プレス、キック。ドロップ、キック。或は流星、星降り、落つるやつをば、又蹴つて虎の尾を出すなど。玉屋、鍵屋も、此には及ばぬと、思ふ程、巧みに。凡そ、髀臼關節、膝關節にて爲し能ふ運動の範圍に於て、自由自在の働きを爲し得る様になつた。然るに。又しても我忠勇なる、而して憐れなるフート、ボールは、再び重傷を負つた。今度は、佐世保の赤十字病院へ、やらうと思つたが。生憎。病院船がこないの。一日だけ教室の戸棚に寝せて置いた。

其の翌日の早朝。西洋畫科の惡戯者は遊動圓木の周圍に集まつた。今日はフート、ボール。が怪我をしていると云ふので。皆々他の遊びごとを考へた末鬼ごつこをしやうと云ふことになつた。

で。皆んなは鬼ごつこに夢中である中。誰れだか知らぬが、手負ひ

のフート、ボールを引張り出して來て蹴らうとしてゐた。然し負傷してゐるものだから、餘り烈しくは蹴らなかつた。だからフート、ボールも隅の方に、悄然としてゐた。處が鬼ごつこ連の或る人が、鬼から逸れて。ボールの傍にきて而して馳けだし序に彼れを蹴つた。驚ろいたのは、フート、ボール。よもや蹴られはしないだらうと思つて居たのを。不意に蹴られたので間誤つて、ヒョロ／＼と遊動圓木の處へ落ちた。此時や。遊動圓木には人が乗つていて、彼の細長き大なる軀は、ゆつさ／＼と動揺してゐたときだ。アツと思ふ間に。ボールは此圓木の下に這入つた。丁度大蛇の腹の下に壓された小兎の如く。何條以て、たまるべき。あなやと思ふ一刹那。耳を貫ぬく最後の一聲、バーン。

これで五圓五十錢球なしだ！

噫バーンの一聲！忘れられぬ一聲！ボール國の言葉だから。判らぬが。翻譯したら『残念だ』と云ふ意味だらう。然し瓦と成つて全うせんより。球となつて碎けると云ふから、彼も又冥すべしだ。

東京美術學校近事（二一八。M・三七・六・一七）

○修學旅行 本校生徒一同へ職員二十餘名附添ひ、五月十二日より三日間、鎌倉江の島地方へ修學旅行をなせり。今其大要を記せば、第一日目の十二日は、午前八時新橋より瀛車に乘じ大船にて下車し、金澤地方を跋涉して鎌倉に一泊し、第二日目の十三日には、鎌倉の八幡宮及建長、圓覺、光明、淨光明、長谷、覺園の諸寺並に閻魔堂、明月院、鎌倉宮、大佛等を巡歴し、江の島に著して岩本樓に

宿り、翌十四日は雨を冒して江の島附近を巡覽し、藤澤に至りて四時十七分の瀛車に搭じ歸京せり。

○岩村〔透〕大村〔西崖〕兩教授其他の渡米 兩氏は五月二十日午前八時新橋發の瀛車にて、卒業生の本保義太郎、白瀧幾之助、海野銀三郎、生徒の眞島中太郎の諸氏と共に米國へ向ひて出發せられたり。

○正木〔直彦〕校長其他の渡米期 正木校長、川端〔玉章〕教授は五月二十日渡米の筈なりしも、米國に於ける審査の都合に依りて延期し、來る八月中出發するといふ。

○千頭〔庸哉〕助教授の應召 同氏は五月四日召集せられ、第三軍司令部付を命ぜられ、同月廿六日征途に上りしといふ。

○日本畫科の恤兵獻金 同科に於ては先頃催したる恤兵展覽會に於ける、其收益金貳百貳拾五圓貳錢を、五月二十一日獻納したり。

○西洋畫科の恤兵獻金 同科に於ては、四月分として、金拾壹圓拾錢を先頃獻納せり。

○恤兵繪畫展覽會 本校の西洋^{〔西洋〕}畫科生徒諸氏は、恤兵の資に充つる目的を以て、六月一日より七日迄一週間、上野公園五號館に於て油繪水彩畫の展覽會を開催す。其出品は生徒の競技に成れる作品を始め、新に揮毫したるもの合計數百點の多きに達し、參考品には、黒田〔清輝〕教授が始めて繪畫を學修せし時より、今日に至る迄の作品を年次を追ふて陳列し、又近年絶えて其作品を世に示さざりし久米〔桂一郎〕教授も、油畫數點を出し、尙岡田三郎助、和田英作、藤島武二、中村勝治郎の諸氏も、新作品を出品せられたり。又同會入場料は一人普通五錢、特別二十錢にて其の揚高は悉皆恤兵費に獻

納する由なり。

○懸賞圖按の當選者 本校生徒諸氏の内先頃來校外に於て懸賞圖按に當選したるは左の如くなりといふ。

一等賞 中央新聞 龍角散廣告 十二町貞吉

二等賞 同 今關 召甫

同 同 空氣暖爐廣告 伊藤 豐吉

○ペリー紀念資金彰誼會大會 過る嘉永年間相州浦賀に來りて、我文化を誘致したるペリー紀念碑を建設せんとて、同國人間に其資金を募集しつゝありしが、今回の時局に際し、全額を擧げて我軍資に寄贈せられ、猶米國に於て頻りに之を募集するの計畫あるを聞き、我教育社會に於ても、其交誼の厚きを謝せんとて此會は組織せられ、五月廿八日午後二時より、高等商業學校講堂に於て決議する所ありたり。當日は本校よりも正木〔直彦〕校長を初め、總代五十餘名出席し、又米國へ送付する爲、同會の依頼によりて、其狀況を寫生せり。今其趣意書、當日の狀況を録すれば左の如し。

本邦今日の文化は北米合衆國政府と其國民とに負ふところのもの甚た多きは世人の普く知るところなり 殊に教育の事に於て尤も然りとす 今や本邦極東に於ける露國の行動に堪ふる能はず遂に干戈を以て相見ゆるに及び米國の人士また盛んに我に同情を表せらるゝは吾人の最も欣幸するところなり 加ふるにペリー^{〔ペリー〕}紀念資金を募集し以て我海陸軍人の家族を救恤するの費に充てられんとす 其友誼の厚き其同情の深き吾人同胞の深く感銘せざるべからざるところとす 是に於て吾人教育に従事する者茲に一大會合を催し赤誠以て此學^{〔學力〕}に對する所の意見を發表し其決議に依りて衷心感謝の意を米國人士に致さんとす 諸君此意を諒して贊同會合あらんことを希ふ。

此趣意書は、鎌田榮吉、高田早苗、山川健次郎、松崎藏之助、箕作佳吉五氏の名を以て發表せられ、官公私立の各學校は進んで之に贊同し、前記の日に於て、會合を催せり。而して當日は、鳩山和夫氏を座長に選定し、委員長山川健次郎氏、左の決議案を提出せり。

決議（原英文）

明治三十七年五月二十八日東京所在の高等學術機關を代表する教育者及學生は茲に會合して左の協議をなす

一、日本が平和の間に國を開きて新なる文明を迎へ新なる生活に進めるは實に提督ペリーとの協議に成れる日米和親條約に其端を發せるを念ひ吾人は茲に北米合衆國政府の厚誼を尊重することを言明す

二、吾人は此五十年間斷えず渝らざる北米合衆國國民の日本國民に對する交誼と其我國殊に我教育に寄與せる多大の功勞を確認して茲に感謝の意を表す

三、今回の戰役に際し吾人は北米合衆國國民の同情を尊重し且特に我軍人の家族に仁愛なる救護を與へられんとすることを深く感謝す

四、日本が自ら今回の戰禍に投ぜざるは斷じて侵略克服の爲に非ずして實に帝國の自衛の爲なり 東洋永遠の平和の爲なり 之を歐西に承けて而して之を己に體せる祝福なる光榮ある文明をば其現に瀕せる危機より濟ひて以て其健全なる進歩を圖らむが爲なることを聲明す

五、吾人は敢て此態度を持し此主義の爲に健闘す 凡そ世界の文明諸國民は皆共に此主義を擁護すべく乃ち其同情の悉く吾人に歸向すべきは吾人の敢て期望する所なり 顧ふに吾人の幾多を款待し厚遇したるは北米合衆國の諸大學にして其教師卒業生及學生と吾人の多數との間には深厚なる恩誼と交情との連鎖あり 故に吾人は今特に如上の期望を擧げて之を北米合衆國の諸大學に屬す

鎌田榮吉氏の贊成演説あり、滿場一致にて可決し、大隈伯、伊藤侯の演説あり。我天皇皇后及び米國大統領及び國民の萬歳を唱へて式を終れり。來會者は日米兩國の有力者、及び各學校の委員等無慮一千五百名に上りたり。

東京美術學校近事（二一九。M・三七・八・二八）

○職員の動靜其後の分左の如し。

五月三十日、教授白井保次郎氏は、從七位に敘せらる。

六月十七日、助教岡田秀氏は、教員檢定委員會臨時委員仰付けらる。

七月七日、雇牧野彦太郎氏は、病氣の故を以て、依願解雇せられたり。

○正木〔直彦〕校長、川端〔玉章〕教授の送別會 七月四日午後五時より、兩氏が渡米につきて送別のため、職員相圖り、墨田河畔八百松樓に送別の筵を張れり。會するもの五十有餘名、近來稀れなる盛會なりき。

○大澤〔三之助〕教授の召集 同氏は七月六日、召集令に接し、近衛歩兵第四聯隊へ入營せらる。

○千頭〔庸哉〕助教 第三軍に屬し出征したる同氏は、目下ダルニー方面にありて、職務に盡さる、同地より發する軍用繪端書には、多く氏が揮毫せるものあり。

○寺崎〔広業〕教授の歸京 第二軍に従ひたる同氏は七月十四日無事歸京せられたり。聞く所によれば同氏が戰爭を實見したるは、金

州の役、得利寺の役等にして得る所少からざりしといふ。其見聞せられたる狀況等は諸新聞に散見すれども、猶本誌にも掲ぐるべし。

○羽田〔楨之進〕助教の近況 動員劈頭に召集せられ第一軍に從ひて出征したる同氏は、韓國に上陸して後、編成せられたる吉田校隊に屬し、鴨綠江を渡り、行進路を第一軍の右翼に取り、永甸城、寬甸城、靉陽邊門、懷仁縣等を略して、漸次前進しつゝありといふ。詳細は通信欄を參看せらるべし。

○増井〔兼吉〕雇 同氏は出征以來、韓國に在りて、鐵道大隊に屬し、職務に盡されつゝありしが、七月七日主計の試験に合格して三等主計に任ぜられ、韓國京城の經理部に轉せられたり。

○石井〔吉次郎〕助教の出征 同氏は既記の如く齋に出征の途に上られたるが、七月十四日膽振丸に乗して戦地へ渡航するの際に方りては、同時に出帆したる常陸丸の慘事ありしが、氏は幸にも此の慘禍を免れたるは俱に共に喜ぶべき事なり。當時同氏の書信中に報じて曰く「常陸丸は一時間先に出發致候ものにて、一時間の差にて大死を免れ申候」と。其後の同氏の來信は通信欄に掲げたり。

○辻村〔延太郎〕助教の出張 山梨縣に於て、七月一日より十日間、漆器に關する講習會を開かるにつき、講師として招聘せられ、講習を終りて同月十四日歸京せられたり。

○西洋畫科恤兵展覽會獻金 去る六月上野五號館にて開設したる同會に於いては、決算の結果、同會の收益金三百五十二圓七十錢を陸軍恤兵費の内へ、七月七日獻納したり。

○正木〔直彦〕校長、川端〔玉章〕教授の渡米 兩氏とも、去る五

月廿日渡米の筈なりしが、聖路易博覽會の審査の延期したるため、一時出發を見合せられしが、愈々八月十二日正木校長は、渡米せられ、川端教授は都合にて見合せたり。

○大村教授其他の在米宿所 先に渡米せられたる諸氏の宿所は左の如し。

大村西崖氏 c/o Imperial Japanese Commission World's
Fair Ground, St. Louis, U.S.A.

白濱 徵氏 Yarmouth St. Boston.

猶河邊正夫氏岩村透氏の宿所は分り次第、次號に掲載すべし。

○第十三回卒業式 同式は七月四日午前九時より校内に於て舉行したり。當日の來賓は久保田〔讓〕文部大臣を始め、松井〔直吉〕專門學務局長、田所〔美治〕祕書官、元宮内大臣土方〔久元〕伯、濱尾〔新〕、久保田〔鼎〕の兩前校長、前卒業生及保證人數十名、並に支那人十數名、席定まるや、正木校長は病氣の故を以て、高村〔光雲〕教授代りて式辭を陳べ、卒業生に證書を、來學年の特待生に證書を、本學年の精勤者に精勤賞狀を授與したり。次に高村代理の訓諭、久保田文部大臣の祝辭、卒業生總代谷齊一氏の答詞ありて式を終り、各休憩所に於て、來賓に茶菓を供したる後、一同を成績陳列場に延きて縦覽を乞ひたり。當日の文部大臣祝詞、卒業生諸氏の姓名等は次に記する所の如し。

久保田文部大臣の祝辭

本大臣は諸子の光榮ある卒業を祝し、併て諸子が克く本校教育の旨趣を體し、益々其學識技能を鍊磨し、操行を慎み、身體を健全にし、以て國家が諸子に期待する所に副はんことを望む。

今や振古未曾有の時局に際し、諸子が恆例に依り、效卒業證書を受領することを得たるは、偏に

天皇陛下の盛徳と、國家の昌運とに依る、諸子之を思ふて、特に大に奮勵する所あるべし。

卒業製作品名及姓名

日本畫科

浦の嶼子	本	松岡輝夫	千葉縣平民
月光	同	川面義雄	東京府平民
寧樂の乙女	同	渡邊忠三郎	新潟縣平民
南淵の祈	同	藤木正之助	東京府平民
籠歌	同	長峰登良雄	千葉縣平民
羽衣	撰	益田珠城	宮崎縣士族
樓閣山水	同	佐治友八	福島縣平民
清涼	同	植松盛之助	長野縣平民
西洋畫科			
自畫肖像	本	谷齊一	栃木縣士族
自畫肖像	同	岩鼻正修	京都府士族
自畫肖像	撰	熊谷守一	岐阜縣平民
自畫肖像	同	和田三造	福岡縣士族
自畫肖像	同	關屋敬次	栃木縣平民
自畫肖像	同	青木繁	福岡縣士族
自畫肖像	同	坪田虎太郎	富山縣士族
自畫肖像	同	深見和成	東京府士族
自畫肖像	同	高木巖	静岡縣士族

自畫肖像	同	伊達五郎	東京府華族
自畫肖像未成	同	兒島虎次郎	岡山縣平民
自畫肖像未成	同	山下新太郎	東京府平民

彫刻科

裸體婦人	本	宮原常二郎	富山縣平民
騎兵將校	撰	内藤伸	島根縣平民
裸體婦人	同	田中親光	東京府士族
播種	同	田口幸三	岡山縣士族
裸體婦人	同	稻垣吉藏	新潟縣平民

彫金科

隴銀製雪朝圖花瓶	撰	小林友吉	東京府平民
隴銀製雲龍圖壺	同	永戸駒彦	東京府平民
隴銀製扇面形梅鶯圖名刺盆	同	小林達實	東京府平民
アルミニウム肖像額	同	玉川健太郎	新潟縣平民

鑄金科

百合花のひかり	撰	小林正次郎	新潟縣平民
---------	---	-------	-------

漆工科

雨後の手筈	本	堀井政吉	富山縣平民
春の色紙宮	同	佐野常榮	石川縣士族

圖書講習科

和樂	本	本間良助	山形縣士族
蟬とり	和	和田元三郎	岡山縣平民
山水	田	田中只八	長崎縣平民

寫生

以上 計三十六人

菊地 整吉〔吾〕 宮城縣平民

特待生姓名 計二十一人

- 太田喜二郎〔子備の課程〕 豫備課 久保 提多〔子備の課程〕 豫備課
- 武藤 直信 (同) 岡 雅雄 (同)
- 和田嘉平次〔治〕 (同) 藤川 勇造 (同)
- 三橋 信吉 (日本畫一年) 山田 廉 (日本畫一年)
- 相馬 正巳 (同二年) 大村 友雄 (同二年)
- 森田龜之輔 (西洋畫二年) 橋口 清 (西洋畫三年)
- 野田 昇平 (同三年) 森垣 榮 (圖案二年)
- 澤田誠一郎 (圖案三年) 十二町貞吉 (同三年)
- 竹内 友吉 (彫刻三年) 八卷於菟三 (彫金一年)
- 原田謹次郎 (漆工一年) 芳賀 晋三 (漆工二年)
- 常木 新藏 (漆工三年)

精勤者姓名 計三十二人

- 久保 提多 中尾熊三郎 武藤 直信 高桑 純吉
- 杉田 宇内 有瀬卯來雄 山田 廉 荻生 守俊
- 伊藤 貞夫 相馬治四郎 近藤 治義 飯島保次郎
- 佐々木璋松 相馬 正巳 大村 友雄 薄 拙太郎
- 森垣 榮 小倉右一郎 吉田 祥三 中村 武平
- 竹内 定吉 原田謹次郎 福田 淡 堀井 政吉
- 佐野 常榮 兒島虎次郎 來海篤次郎 前田 耕次〔色〕
- 正木 金吉 小林 友吉 竹森 三治 澤口 悟一

卒業生
特待生科別人員一覽
精勤者

科名	卒業者	特待生	精勤者
日本畫科	本科……………五	……………六	……………一四
西洋畫科	撰科……………三		
	本科……………二	……………四	……………一
圖按科	撰科……………一〇		
	本科……………四		……………二
彫刻科	撰科……………一	……………三	……………四
	本科……………四		……………四
彫金科	撰科……………四		
	本科……………一		……………一
鑄金科	撰科……………四		
	本科……………一		……………一
漆工科	撰科……………二	……………三	……………四
	本科……………二		……………二
圖畫講習科	……………四		
小計	本科……………一〇	……………二一	……………二五
撰科	……………二	……………七	……………七
講習科	……………四		
總計	……………三六	……………二一	……………三三

○夏季講習會の開設 八月一日より三週間、本校にて開設せらるべき木炭畫水彩畫夏季講習會は、豫定の如く開會し、主任講師は和田英作氏、講師は小林萬吾氏にして、實習を爲すの初、和田氏は其手

法に關する講話をなし、後に實習に移るの順序にて、日々教授せられつゝあり。其講習總會員は九十六名にして、内中學及同程度以上の學校に於ける圖畫教員五十九名、小學校圖畫教員三十七名なりといふ。

○十八大家合作の八曲小屏風 日本銀行より、前同行總裁山本達雄氏に贈るため、本校にて製作せし木製八曲小屏風は、高一尺壹寸、横八寸、縁五分、總幅七尺餘、表裏十六面ともに何れも當代名工の手に成りしものにして、松方〔久元〕伯が「精華」と題したる二字は黒檀地に石原貞明氏が蝶貝を嵌入したるもの、兩面の甲板は一位木、框縁は桑、地板は柃桐、四方透の金物は烏銅、羽目は鍍金にして、豊田光古氏の手に成り、紐は古代紫、明治廿七年三月下旬着手し、同年六月上浣竣成せり。其作者は左の諸氏なり。

橋本雅邦氏の仙洞娛樂▲高村光雲氏の閑窓啼鳥▲瀧川惣助氏の無線七寶の月▲山田長三郎氏の鐵打出兎▲川之邊一朝氏の蒔繪田家▲宮川香山氏の光琳式陶額▲大島如雲氏の鑄出甲虫▲川端玉章氏の雪中樓閣▲海野勝珉氏の隴銀飛雀▲安藤重兵衛氏の七寶白菊▲石川光明氏の牙彫羊▲荒木寛敵氏の梅に孔雀▲香川勝廣氏の影金菱▲加藤陶壽氏の陶額▲今尾景年氏の鹿▲野口小蘋氏の蔭綠朱梅▲竹内久遠氏の木彫拈華微笑▲白山松哉氏の蒔繪地塘春草

東京美術學校近時〔二一一〇。M・三七・一〇・六〕

○職員の動靜其後の分を録すれば左の如し。

七月二十日、古宇田〔実〕囑託は造園術研究の爲京都府へ出張を

命ぜらる。

同月三十日、和田〔英作〕教授は夏季講習會（木炭畫水彩畫）主任講師を、小林〔万吾〕助手は同講師を囑託せらる。

八月四日、休職たりし寺崎〔広業〕教授は復職を命ぜられ、同時に戰爭畫取調囑託を解かれたり。

同月九日、津田〔信夫〕助教授は學術研究のため、大阪府、兵庫縣、香川縣へ出張を命ぜらる。

同月十一日、高村〔光雲〕教授は正木校長米國出張中校務代理を命ぜらる。

同月同日、辻村〔延太郎〕助教授は髹漆術研究のため廣島縣、長崎縣へ、黒岩〔倉吉〕助教授は、古彫刻術研究のため、京都府、奈良縣へ出張を命ぜらる。

九月一日、松園〔石水〕囑託は兼て病に罹り、根津眞泉病院にて治療中なりしが、此日遠逝せられたり。實に惜むべきなり。

同月七日、加茂正雄氏の囑託を解き、大島勝次郎氏に、鑄金科に課する蠟型授業を囑託せられたり。

同月同日、野田〔義守〕書記は病に罹り、八月十六日より大學病院に入りて療養せられしが、遂に其効なく此日易簣せられたり。

寔に悲むべし。

同月同日、高田〔松男〕書記は會計主任兼文庫掛主任を命ぜらる。

同月九日、助手小林萬吾氏は、助教授に任せられたり。

同月十日、堀井政吉氏は本校雇（漆工科助手）を、谷齊一氏も亦本校雇（美術解剖助手）を命ぜられ、香取秀次郎氏は、彫金史授

業兼務を、古宇田實氏は従来の建築學の外、建築史、建築製圖實習、用器畫法の授業を囑托せらる。

同月同日、關〔保之助〕囑託、玉田〔文作〕助教は、生徒修學旅行に付、奈良縣及京都府へ出張を命ぜらる。

九月十二日、庶務掛主任屋代〔鉞三〕書記は、教務掛主任兼務を命ぜられ、且會計主任野田義守氏死亡に付、會計規則第九十二條〔立会人〕に依り立人會を命ぜらる。

同月十三日、中澤治之助氏は、本校雇〔會計掛〕を命ぜらる。

同月十四日、田中徳之助氏は、本校雇を命ぜられ、體操助手兼教務掛を命ぜらる。

同月十七日、中村勝次郎〔治〕、水谷鐵也、鶴田幾太郎三氏の雇を解かれ、更に中村氏へは西洋畫の授業を、水谷氏へは彫刻科の授業を、鶴田氏へは日本畫科の授業を囑托せられたり。

同月十九日、久米〔桂一郎〕教授は高等商業學校教授に兼任し、高等官四等に敘せらる。

○海野教授の歸朝 兼て佛國へ出張中なりし海野美盛氏は、命ぜられたる用務を了へ、八月八日無事歸朝〔られ〕せられたり。

○夏期講習會の閉會式 前號に記したる本校に於ける木炭畫水彩畫の夏季講習會は、實習の傍、木炭畫水彩畫の手法〔和田〔英作〕主任講師〕配色の話〔同講師〕希臘の繪畫〔久米〔桂一郎〕教授等〕の講義ありて、既定の日數を終りたるを以て、八月二十日午後一時より、第一講堂に於て閉會式を行ひ、高村〔光雲〕校長代理の演説、講習證の授與、會員の答辭ありて式を終り、それより日本畫科の教室に於て茶話會を開き、席上和田〔英作〕教授の歐洲漫遊談な

どありて午後四時頃散會せり。

○卒業生同窓會 暑中休暇を利用して、地方より上京せられたる諸氏も少からざるを以て交誼を温め、親睦を圖るの主意に依りて、本校内を會場とし、八月九日午後二時より同窓會を開きたり。會するもの七十三名、寺崎〔広業〕教授の臨席を乞ひて、同氏の觀戰談を聞き、或は舊年を語り、當時を談じ、日暮るゝに至りて散會せり。而して當日來會諸氏の姓名を録すれば左の如し。

同窓會出席者姓名〔申込順〕

正木會長○寺崎教授○戸田忠雄○長峰登良雄○佐治友八○小倉要
○吉田金吉○加藤紀高○竹本曜二○乾長光○鈴木雪哉○水谷鐵也
○佐藤均○秋保親美○藤木正之助○出口清三郎○關欽哉○金井義
司○松原象雲○川面義雄○小場恆吉○三井由太郎○柴野健作○今
戸精司○高村光太郎○松里政登○井芹市次○西松團三○志賀貞三
郎○友枝安○丹羽五十吉○小西正太郎○藤岡金吾○久野龜之助○
山邊知臣○武谷富造○吉澤喜作○福岡義雄○佐藤八百○鈴木久治
○秋山要治○竹下舊俊○移川三郎○白井保次郎○谷齊一○津田信
夫○黒岩倉吉○渡邊長男○伊藤繁延○木村俊秀○大橋郁太郎○板
谷嘉七○田中和一○田中重次郎○高木巖○船井登久太郎○中田清
○關保之助○河原崎謙吉○岡本勤○井上清○香取秀次郎○鶴田幾
太郎○四谷正美○柴崎恆信○荻生田文太郎○山本鹿洲○長愛之○
瀧本友太郎○大石榮雄○倉田重吉

○羽田〔禎之進〕助教の昇任 同氏は軍籍に在りては少尉なりしが、八月廿八日中尉に昇任せられたり。

○石井〔吉次郎〕助教の近狀 同氏は旅順方面の戰鬪に参加しつ

ありて、幸にも未だ負傷だも負はざれども、随分激戦せられたる様子なり、詳細は別項通信欄を参看せらるべし。余輩は同氏の益自重し益々健全にして職務に盡され、殊勲を樹てられんこと翹望に堪へざるなり。

○新入學生諸氏 假入學及競争試験に合格し本年九月十一日より、新に本校に入學せられ本會員となりたる諸氏左の如し。

新入學生科別姓名

高木左直、山脇信徳、増田久太郎、香川敬事、眞田久吉、宇都宮宰造、生野恆太郎、半田松次郎、久米福衛、近藤浩、望月光男、山本兵三、菊池香三、跡部直治、岡村英雄、鹿毛屋藏、竹田豊太郎、渡邊乙彦、小森研二、住谷宗一、山本貞治、高中文助、金山平三、清水大助、西長純、上田貞治、柏木正賢、飯田孝壽、若松長義、佐藤悠次郎、高橋五平、寺尾熙一、日吉守、神谷甚一郎、廣瀬尋常、富本憲吉、溝淵盛美、龜甲伸之介、鈴木秀雄、小林徳三郎、山形張蘇、豊島鋭郎、石川巖、幕田安兵衛、九里四郎、紺野三郎、永田米吉、酒卷貞吉、加藤卓爾、熊坂圭二、中溝四郎、甲斐英雄、長野靖彦、江澤茂信、室野琢磨、番匠勇作、野口安太郎、津田良次郎、長谷川源太郎、渡邊靱、野原安司、佐藤周平、磯矢隆之、太田益三郎、宮崎秀勇、谷口房太郎、蒲生俊武、小澤保二郎（以上豫備之課程へ）

若井徳吉、大串喜代次、空閑陽樹、小林泰助、小林波之輔、奈良重三郎、三宅輩、古田正記、佐多虎二（以上日本畫科撰科一年へ）

石井松司、松岡溟藏、齋藤五百枝、小川千藏、富永勝重、北村重

樹、宮川安信、三浦哲、安藤東一郎、青山熊次、平野馨二、石井満吉、高田正雄、久野延太郎（以上西洋畫撰科一年へ）

相羽彦次郎、矢野一生、天野正十九、保阪鐵次郎、佐藤金次郎、浄土太四郎、田中玉次郎、相馬越二、近藤三四（以上彫刻撰科一年へ）

岸原哲藏、堀井董（以上彫金撰科一年へ）

小野直平、増田正嗣、齋藤作吉（以上鑄金撰科一年へ）

武川平治、石野監藏（以上圖書講習科へ）

○増井〔兼吉〕雇の近況 同氏の韓國京城に在りて、軍務に盡されつゝあるは、嚮に報道したる如くなるが、其後露軍元山襲來の報に接し、同地へ急行すべき命を受け、八月十九日元山に到着、目下同地に在りといふ。詳細は別項通信欄参看せらるべく、猶前號に同氏を三等主計とせしは、三等計手の誤につき、茲に之を訂正す。

○高村〔光雲〕教授の出張 同氏は古社寺保存會の用務にて、去七月中旬より八月上旬迄、滋賀縣下へ出張し、調査せられたり。

○島田〔佳矣〕教授の出張 同氏は例年の如く招聘に應じ、八月申長崎縣三河内へ圖案傳習のため出張せられたり。

東京美術學校近事〔三一〕。M・三七・十一・三

○教授諸氏の陞任 教授藤田文藏氏は高等官五等に同海野子之吉氏は高等官六等に同島田佳矣氏は高等官七等に、孰れも九月廿八日陞任せられたり。

○休職満期 休職中なりし助教島田友春、同本多佑輔、同天草友

雄の三氏は去る九月十二日、何れも休職満期となれり。

○各科四年生の修學旅行 例に依りて各科四年生は奈良縣下及京都府下へ旅行せり。今年は教務の都合にて少しく出發の時日を早め、九月十四日東京を出發して奈良に赴き、それより宇治を経て京都に入り滋賀縣下をも巡覽して同月卅日一同無事歸京せり。指導教官は關〔保之助〕教員玉田〔文作〕助教授なり。

○本校設置紀念式 十月四日午前九時より校友會俱樂部に於て執行せり。高村〔光雲〕校長代理の演説に續きて竹内〔久一〕教授は本校創立前美術に關する狀況の一斑を説かれ、次に海野〔美盛〕教授の佛國に於ける本邦苦學生（本校に關係なき人）の有様を見て大に感嘆すべきものあり、願くは斯の如き決心を以て、大に驥足を海外に伸ばし、名譽を宇内に輝かさんことを卒業生生徒諸君に望む旨を述べ、夫れより茶菓の饗應ありて、談笑歡語の裡に散會せり、會するもの三百餘名。

○正木〔直彦〕校長の著米 同校長は海路恙なく、八月廿三日著米、晚香坡に上陸せられ、直に聖路易^{セントルイス}へ向ふ旨通知ありたれば、同月三十日頃よりは博覽會を觀覽し校友諸氏と快談せらるゝなるべし。

○羽田〔禎之進〕助教授の近狀 出征中の同氏は、遼陽の役に於て右翼の梅澤支隊に屬し、戰鬥に参加せられしが、微傷だも負はざりしよし最近の通信に見えたり、願くは益自重せられ殊功を樹てられんことを望む。

○第五回内國博覽會の賞牌 同賞牌は博覽會事務局より、其製作方を本校に依頼せられたるを以て、本校にては、海野〔美盛〕教授を

して佛國に出張せしめ、研究を重ねて之を製作せしむることとなり、同教授は昨年出張して従事せられつゝありしが、先頃同教授の歸朝と共に、賞牌の全部到着したるを以て、此程悉皆之を農商務省に送致したりといふ。

○結城〔貞松〕助教授の近況 同氏は目下近衛歩兵第二連隊補充大隊第四中隊に在りて、軍務に服せられつゝありしが、九月廿七日軍曹に昇任せられたりといふ。慶賀すべきなり。

東京美術學校近事〔三一。M・三七・十一・二七〕

○職員の動靜 其後の分左の如し

十月十五日、藤岡福三郎、鹽崎重一の兩氏は、各本校雇（文庫掛）を命ぜらる。

同月廿六日、香取秀次郎氏は、學術研究のため、京都府大坂府へ出張を命ぜらる。

十一月十四日、米國へ出張中なりし本校長正木直彦氏歸朝せられたり。

○修學旅行 本校職員生徒は、十一月四日より六日まで箱根地方へ修學旅行をなせり。其第一日は新橋より國府津迄汽車に乗じ、それより徒歩して箱根底倉に宿し、第二日は小涌谷、芦の湯を経て、曾我兄弟の墓を弔し、古關跡を見、箱根町を過りて箱根社に詣り、其寶物を拜觀し、路を湖畔に取りて、姥湖、大涌谷（大地獄と稱す）を過ぎ、仙石湯場、強羅、二ノ平を経て底倉に歸り、第三日目は、底倉を發し、氣賀、宮城野、仙石原村を経て乙女峠を躑え御殿場よ

り瀛車にて歸京せり。

○生徒の應召 先頃來本校撰科生徒中召集せられたるもの左の如し。

彫刻撰科研究生 杉本 傳

鍛金撰科四年 濱野鶴三郎

西洋畫撰科三年 伊藤 直利（和）

漆工撰科二年 河面 冬一

西洋畫撰科一年 安藤東一郎

○羽田〔禎之進〕中尉の昇敘 同氏は十月二十七日、從七位に敘せられたり。

○岩村〔透〕教授、大村〔西崖〕教授の消息 兩教授は來年二月中に歸朝せらるべき豫定を以て、去九月聖路易より英國へ向け出發せられたるやに聞く。

東京美術學校近事〔三一三。M・三七・十二・二三〕

○教授諸氏の昇敘 久米〔桂一郎〕教授は正六位に、藤田〔文藏〕教授は從六位に、海野〔美盛〕教授は正七位に、島田〔佳矣〕教授は從七位に、孰れも十一月三十日昇敘せらる。

○正木〔直彦〕校長の歡迎會 十一月十四日米國聖路易博覽會の用務了へて歸朝せられたる正木校長の見聞談を聞き、且歡迎の意を表するため、職員一同相謀り、十二月三日同氏を柳橋龜清樓に招請して、午後一時半よりその博覽會に關する講話を乞ひ、終りて宴を張りたり。當日會するもの凡六拾名。近來稀なる盛會なりき。

○縮影器械の据付 海野〔美盛〕教授が校命に依り、佛國より持歸られたる縮影器械は、此程本校鑄金工場の側に据付けを終り、其運轉に差支なきまでに運びたり。

○職員の恤兵寄附金 本校職員一同は高等官は俸給月額百分二以上、判任官其他は百分一半を醸出し、金六拾圓を此程陸軍恤兵部に寄附したり。

○西洋畫科の恤兵寄附金 西洋畫科の職員生徒一同は、金拾圓を十一月分として、此程陸軍恤兵部に寄附せり。

○出征諸氏への見舞 本校職員中の出征者石井〔吉次郎〕、千頭〔庸哉〕、羽田〔禎之進〕、増井〔兼吉〕の四氏の辛苦を慰むるの微意を表せんため、本校職員一同より、巻煙草其他二種の物品を贈呈したり。

○卒業生諸氏の戦時召集者 今般調査したる處によれば、卒業生諸氏の中、今回の開戦のために召集せられ、内地に於て勤務するもの、並に出征せしものを合算すれば計四十五名あり、今其科別に之を示せば左の如くなりといふ。

日本畫科二十四名△西洋畫科二名△圖按科三名△彫刻科四名△彫金科三名△漆工科三名△撰科二名△特別之課程二名

○故羽生道也氏の香資 本校卒業生にして陸軍中尉なりし同氏の追悼會を、十一月廿七日日本郷龍岡町の麟祥院に營むに就き、本校職員中の有志者は、金拾圓餘を醸集し同日同氏の靈前に供へたり。但此外本校卒業生にして、本校職員となり居らるゝ向は、同窓會より同會員として出金せられたり。

教室雜俎〔同〕

◎圖案科教室 顯れ出でたるは十二町〔貞吉〕の俗稱ストープと口ぐせ、森垣〔栄〕の十二階色男鳥をも落すの風勢なり、人見〔鉄三〕の熊手鬚一寸氣取つたそれで〇〇が大好きだそーやろー、松川〔第八郎〕の壯士俳優、小島〔喜三郎〕の露探、中久木〔富二郎〕のベストの親玉、磯野〔富之助〕ソーケー、杉浦〔恭二〕走馬燈の補充兵召集かと落付かず、君島〔金三郎〕は君子の相か、鈴木〔善夫〕天文學者曰く北の風晴れ、阪谷〔良之進〕ノンキボーの運動家ウンバカニシテヤガラー三野〔雅一〕の蠻カラおとくいはこれお半、岡〔雅雄〕更になしヨシエヨー、鳥海〔豊〕は失戀の相常にあり別役〔良民〕ベランメー雨が降てもかりんとう、古田〔立次〕めんそをチエンクシャーン、有瀬〔卯来雄〕馬めしくいこうウワー島〔齊〕一寸もう先から岸〔熊吉〕……仙石〔貫造〕通辯大鼻何ハツタラスゾー萬事理解に苦む、小川〔巽〕のあたまへの玉山人、藤田〔郁太郎〕は隅田の古河梨〔コガナシ〕大川口蓋はねーぞ永榮〔定義〕無花果あかさされたいさぎよくぶちころすぞー、寺尾〔漉一〕ババ、スキー、日吉〔守〕は御寺のがりかり小僧、廣瀬〔尋常〕の國民幹部土佐馬、富本〔憲吉〕大地^{〔獄カ〕}嶽雷獸、酒卷〔貞吉〕ノツペリ色男の好モデル、加藤〔卓爾〕蛙、江澤〔茂信〕の百科全書、番匠〔勇作〕ゴールデン意不明、磯村〔茂作〕の陰君子とか、種々な其特重のみ人々の取沙汰。

◎西洋畫科第一教室 學校の門の兩側に眞白に咲き亂れたる櫻をオベリスクとは通がる西洋畫科生の見立て、今日は朝早くから第一教室の窓が開かれてゐる、此窓は年中閉じた限で教室が鬱としいが、

西洋畫科女子部生徒〔マリー・イーストレーキ〕新入の祝日に何故開けぬか、と委員川北〔元英〕君がブツ／＼云つたが、其實地獄の釜の開く日に腹の立つ道理はない、安田〔稔〕君松林〔千里〕君土井〔元生〕君九里〔四郎〕君等常の日よりも一層美しく分けたぞ、兼て長原〔孝太郎〕先生より懇々と御説諭もあることなれば、今日に限つて外見を飾り立てては男の品位が下がる事御承知の筈を、皆タスツカリ忘れたか、金のパレット銀のオリープを入口に掲げ、紅のバラを胸に翳した面黒さ、小林〔永二郎〕君太田〔喜二郎〕君など口先の尖つたは入口に立つて他科他組の生徒がやつて來ると、女の生徒が珍らしいか——御用が有らば又明日——邪魔になるつて云へば——と雜作なく返へして了ふ室の内には五六十の生徒がワヤ／＼。今週は羅馬法王の石膏を寫生せよと土曜に聞いて置たが、それでは餘り抹香臭いとて却てヴェナスの大なるを海老茶の上^{〔直〕}に立て、イーゼルに菜の花蒲公英の黄なのを飾つてゐる人々に脹れた顔付は一つも見當らず、麻生〔茂〕君島田〔繁夫〕君武藤〔直〕君美作〔武雄〕君など平生あまり表情し給はぬ方の、コハ如何に——口の御締り解けたと見える、有田〔四郎〕君の美音溶ける様に、和氣満ちたる室を波動し、準備は大概完成した、杉田〔宇内〕君吉田〔苞〕君油井〔忠助〕君など九時を過ぎてても出て來ぬのは羞かしいとか、それとも上野の森に歩哨でもしてゐるか、而し今にも長靴の音高く先生が見えるだろう、そして又清水燒の人形を見た様にピカ／＼と鼻の低い連中が入つて來るに違ひない、マ、ヨ生徒として決して恥ぢるに及ばぬ、天地に俯仰しても安心だ、僕等は小供の一寸大きく成つたばかりで、怒つた時は恐ろしい顔もする、悲しい時は

泣くが決して露骨ではなく、それはく美しい表情を持つてゐる、今日とても物珍らしいといふ丈の事、理性を滅却するなどは更々ないともく、若し新入のオカメが生意氣なら容赦も何もあるものか、直ぐブンナグルゾとそれそこに丈高い中村〔元麿〕君が居るんだもの。

●日本畫科三年 歳の暮などに苦勞のない代りに、去る霜月の末頃は押つまつて根氣が盡きて、びく／＼しながらも仕上に忙しい競技製作、後は時雨の霽れた師走の空の只何となく爽かな朝、ゆつたりとした面持で例のストーブの周圍に集る、こうしてゐる所を甘く寫眞に撮れば面白いが、宮内などの箱のやうな室内で、皆が鹿爪らしい面をしてゐる所などは一向つまらなかつた、と懐手の奴が妙にひねくると、なアにあれでも三年面の標本ぢやないかと寫眞通がまぜつかへす、此君昨年の休暇には多摩川の上流に冬籠つて、友は銃獵に君は寫眞に、凍えるやうな雪風をも厭はなかつたといふ斯道の熱心家だが、偶々大牛が崖を踏みはづして谿底に墜落したとやらで、滯留一週間は牛肉の食ひ詰に閉口したとは嘘のやうな話だが、高が山奥の一籬落一頭の死牛にもあましたとは、さても君は仕合せの好い男よと一人が冷評す、イヤそれに就て想ひ合せると箱根旅行の時にさ、御殿場に着いての夕、眞白になつた富士に襟元の寒さぞく／＼身に沁むから、腹の減つたのは尙更堪難う、何か暖なものにでもありつきたいものと思ひ／＼に出掛けたが、失望の外はない冬枯の里、氣の利いた蕎麥屋さへもない悲しさは、相場が下つてでは川越屋のアミダで我慢しやうと、俄に引いた貧棒籤に、使の役は三左衛門殿、尻輕に坐を立つて、應て拵らへの品物ポカ／＼の風呂

敷包を片手に歸つて來る面構へ、あの姿を細君に見せたかつたなど一同大笑いだ、なあに何、見給へ此袴の綻びよ、年はこう老けて見えてもまだ縫つて呉れる人は無いんだよ、と眞顔になるもしほらしい、更に笑の鎮まるのを待つて皮肉な一人が、君等聖人のアラを拾ふを止し給へ、妓にゐる此男さ、宿は荒れ寺の一室におさん入らずの自炊の竈に、亂暴ぢやないか、昨日の夕方も墓場の卒塔婆を抜いて來て焚き付けたぞ、とスツバ抜いたので、抱腹絶倒の笑聲鳴り響くやう、折柄ドアの握手がガチリと音するにギョツとして一齊に振り向くと、イヤおはやうと例の大聲で天服姿の鯛生さん、「モデルはまだ來ないのか」と尋ねる、「ウンまだだ、ズルくて困るよ、待ち遠いなあ、「さう、まつとしきかばいまかへりこんか」と例の口癖のやう（青歸〔西村喜三郎〕）

○日本畫科第一年 吾々の日本畫科一年生は皆揃つて年中大勉強家のかたまりです、善く云へば直面目ですが、悪く云へば、くそ勉強連の一團躰です。常に成績品を畫き終ると、夫れぞれ寫生やら摸寫やら各自好む所の大勉強です。ストーブ會議もなく、學校へ來ると歸る迄、机に寄り切りで別に此男と云ふ様な奇人も名物男も御座いませんが、何を云ふにも當校は世界に只一つ、東西南北より、或は米國人迄席を置く位ですから、余のクラスにも奇名の男爵が少しはあります。他級と一種異なつた名の者許りです、羅漢さんも帝釋天、義太夫講談家、ノツポ、ジツクリ、青フクベ、於龜、オポツチヤン、阿彌陀、フクロウ、廣目天等、びしびしと圓覺寺の金堂を欺く位立錫の間なく並んで居ますが、今年は三三人位御紹介して御免蒙ります、本科の方から挙げますと今度いくら天竺一杯唐一杯、地

獄極樂もろもろの神や佛を祈つても、出征免れ難いのは首席者の羅漢さんで、又一名饗餐と申します、年々一年には羅漢は付きもので、此羅漢さんの名はどうして失せられやうか、此春愉快な愉快な、あの鎌倉地方へ旅行の折、石坂君から南無三法賜銘だもの忘れられぬ善き名です、又相當したる名です、此羅漢さんの髻と來たらバリバリして熊手の様で兩眼は寶石の如く黒面に輝て居る、齒鋭くして其巾の廣きこと三春馬や南部名馬を凌ぐ様です、生れは加賀の金澤で、先祖代々前田公の家臣です、此獯猛なる面相は確に武士道が表れております、若し兩眼を圓くして怒る時は、流石山嵐やタイガアにも上げるそうです。昔の羅漢は寶玉製の念珠を首に懸けて居つたそうですが、此羅漢さんは如何な御利益あるのか、巾が正しく五寸もあるまいが、四寸半のハイカラです、之を首に懸けて毎日まつかになつて首が回らんそうです、是が羅漢スタイルの廿世紀第一の變化でしやう、斯かる珍らしき獯猛なる御面相におわしまして、此娑婆に御降誕しましたのも、あの出雲大社の神が全國の諸々の神を集めて、御兩親様を都合能く集めたる一因果と思ひます、此羅漢さんに他人の及ばざるものは歌です、其美音にして上手なること御髻に似合ません、竹に成るならと出したら、其れはそれは式部も、龍も、閻魔も、鍋もシヤモジも、切盤も、白も、一緒に笑つて踊り出す様ですチャカホイ、エンヤヤヤ假張のカタマリダは其内最も御得意の所です、あたらし勢ある羅漢さんも、いくらハイカラでかくさうとしてもかくれぬ、御髻ポウポウで何處に行つてもたてたことはない、御肘鐵砲とは誠に可哀相です、此れがやけになつてから、ストーブの傍で例の居眠はころつとやめ、毎日午後四時迄學校で大勉

強とは未來多望の一人です、次に擧げますのは一寸見た所では砲兵工廠の職工か、又は帽子のかむり様子では、郵便局の小使か、キヨロキヨロして居る目を見ると紙屑拾ひか、服を見ると極く高くて、年給廿圓位の紳士と見える男で、朝極く早くて午前十時頃ノツコソツコやつてくるのです、而して歸る迄ペラペラ御しやべりの得意です、それでおしやべり武一と云つて、石坂武一と呼ぶことは實に稀です、日本畫二年にも斯かる於嬢さんがあるそうですが是れも同様種子は越後、廻り廻つて廿世紀の漸く江戸子連、毎日御話の盡きたことなく其皮肉家たり悪口家たること、正しく日本畫一年のチャンピオンだ、あの遠い遠い高天原に行き去つた加藤〔義明〕君と云へ、又退學した新聞〔秀一〕君と云へ豫備の時は中々の名物であつたが幕さへ開けば名物男の種子も盡きぬ世の習いで、此おしやべりは先の二人分兼備して居る、一寸顔を見た許りではお坊ちゃんの様ですが、卒業後をれこそは女學校教員だと此の言は假令烏鳴かぬ日ありとも云はざる日なしです、大の新派崇拜家で朝來ると歸る迄、自畫の勉強よりは、寧ろ人のを後から悪口云ふのが、餘程の念を入れて居るらしい、本科の方へ悪口終つて歸つたと思ふと、撰科の方で二時間も悪口を並べて居る、片端から、全るで西の市に頭賣の陳列の様に、琉璃、金明水のしたゝる如き巧の辯を以て、悪口の陳列である、又其氣焰と來たら當るべからずだ、土佐狩野等の諸派を一言の下に野蠻の畫となす、此男去つて始めて皆颯風の止みし如く、五斗張白を背より下せし如き感をなす様です、此新派崇拜家が、今迄舊派を夷狄の如く云ひ居りしに、此頃古畫の模寫を始めたとは、中々不思議だ、是が一年の七不思議の一つです、此勢で後日式部を

教導すとは式部白腕の進歩未來多望です、今より教育家志望の心得、中々用意周到です。次に御紹介致しますのは撰科の方の頭に毎日ツンツンと絶へず鼻を鳴して模寫の熱病家、余等にしては去つた後に、鹽の一俵も振りたい位の模寫熱病、空閑〔陽樹〕君です。此れは九州から遙々慈しき兩親兄弟に別れて、美術學校迄來たとは實に感服の外なしだ、又模寫の御熱心には、滿腔の同情を表してよい、其れで筆と紙は手より離れたことがないので、是を一年の四天王の一人廣目天と申します、撰科の隅の方に如何にも壯嚴らしく目を細め、パチパチして立つて居ります、六角〔勘次〕君も傍で只今芳崖の不動を模寫して、中々能く寫して居りますが此廣目天の御利益が十二分半きいたからと思ひます、此神は毎朝第一早く例の御座に御臨座ましまして、紙と筆を一度手にしたら最早歸る迄は、決して休むことなく、模寫する許りです。重に狩野尊神の様で常備品は最早大底寫し切つた様です、此割で四ヶ年本校でやつたなら、宋明の御府の寶畫より多くなりまじやう、九州迄只人一人行くに十五圓の費用と聞く、況んや此大神が汽車の箱五十輛に乗せて四ヶ年の後歸るとは費用推計られます、此大勉強神の御面相を申しますと、頭を後から見ると、圓で田舎の味噌玉の様ですが、前から見ると眉毛はピンとして、ぶたの様で、鼻はつんとして、延びた故か、其高きことロスキーの様です、御髯の生ひ具合は、八字の如く、ピンとして公家様風と見えます、頬は元祿美人を欺く様です、口は何時でもしまりなくあいて居る所は、確にぼた餅が棚から落ちるのを待つて居るらしい、齒は白雪の如く氷の如しだ、腰の邊に愛嬌がある様に見える、中々の善い子ですが、あな可愛相には美術家と生れたるが

不幸、美術家として免れ難い、いやな相が十五分コンマ二三程何となく含んでおる、然れど神よ怒り給ふな當世の大家と言はるゝ人も顔は悪い人もあるアーメン、此神は入校以來、誰の畫でも善き畫なりと稱美した事ないさうです、凡て博物館にある、應擧の山水屏風に就て、寺崎〔広業〕先生の眼前にて、先生あれはサッパリなつて居りませんねと申されました、又芳崖さんの不動もめちやめちやにやられた方だ、随分御大膽におわします、果して應擧芳崖の作を不出來と見給はゞ、神よ今後如何なるものを畫き出すか、餘等に何卒畫いて見せ給へ、アーメン

関連事項

① 恤兵展覽會

日露戦争に際して日本画科と西洋画科は恤兵献金のための展覽會を開き、収益を陸軍恤兵部に献金した。

日本画科の展覽會については『美術新報』第三卷第三号(明治三十七年四月二十日)に次の記事が掲載されている。

○美術學校繪畫展覽會 東京美術學校日本畫科生の催しにかゝる恤兵獻金繪畫展覽會は、去十五日十六日十七日の三日間、同校内〔校友会俱樂部〕校友俱樂部に於て開會されしが、川端玉章、荒木寛敏、寺崎廣業の諸教授を始め學生の新作出陳せられ、見る可きもの多く盛會なりし。猶同會には参考室を設け、故芳崖の山水と不動明王、橋本雅邦氏の月夜山水其他玉章、廣業、觀山、春草、靉音、武山、神來等諸氏の舊作を陳列し〔マコ〕れり。